

ねん がつ とおか
2021年7月10日
ねんかんだい しゅじつ
年間第15主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

アモスの預言は、北イスラエル王国の滅亡を告げたアモス自身が、「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培するものだ」と宣言する言葉を伝えています。当時存在したと言われる専門職としての預言者団ではなく、ごく普通の人を通じて、神は運命的なことばを伝達されました。

パウロは、キリストの血によってあがなわれたものはすべて、神によって選ばれたものとしてその救いの計画に参加するものとされたことを指摘します。

マルコ福音は、イエスが十二人の弟子たちを呼び集め、二人ずつ組にして、福音宣教のために送り出したことを記しています。イエスは弟子たちを派遣するにあたって、あれこれと個人的な必要を整えることなく、まずは出かけて行って、行った先の家に滞在せよと命じています。下着の枚数が何枚かの議論はさておいて、この派遣の意味は何でしょうか。

弟子が二人で派遣されたことは、宣教の業が個人プレーではなく、共同体の業であることを明示します。また、準備万端整えられたプログラムを通じてではなく、日々の生活における他者との交わりにあって、支え合いと分かち合いを通じて福音が伝わっていくことが示されています。

すなわち、福音宣教は、特別な人だけが行う特別なことではなく、だれでも神の言葉を告げるように召されるのであり、それは個人プレーではなく共同体の業であり、なおかつ、日々の生活における他者との交わりの中で、支え合いながら、分かち合いながら具体化される神の業です。

教皇フランシスコは「福音の喜び」に、「神は人々を個々としてではなく、民として呼び集めることをお選びになりました。ひとりで救われる人はいません(113)」と記して、

教会は共同体として救いの業にあずかっていることを強調されます。その上で教皇は、「洗礼を受け、神の民のすべての成員は宣教する弟子となりました。・・・救いをもたらす神の愛を経験している人ならば、それを告げに出向いていくための準備の時間を、さほど必要としないからです（120）」と、呼びかけます。

東京大司教区では、先週も触れたように、多くの方々の声を基にしなが、共同体としての宣教司牧方針を定めました。その三つの柱の一つは、「宣教する共同体」となることです。

わたしたち信仰の共同体は、神の国の福音をこの世に伝えるためにあります。教会共同体は、福音を告げる共同体です。現在、東京大司教区には70を超える小教区共同体が存在します。また、各修道会の共同体も多数存在します。これだけの数の信仰の共同体があるということは、地域の人々に、社会に、そしてこの世に対しての宣教の基盤がすでに十分に存在していることを意味します。福音宣教の道具として、活用していたでしょうか。わたしたち一人ひとりの責任です。今あるものを十分に生かしながら、また場合によっては宣教の拠点を新たに設けながら、主イエス・キリストの福音をさらにあかししていきましょう。

宣教司牧方針に、「宣教する共同体はキリスト者を増やすことだけが目的ではありません。すべての被造物が神の恵みの中に生きることを目指します。すべての被造物が主イエス・キリストの救いのわざにあずかり、天の御父のもとに秩序づけられ、お互いに深い関わりの中にあるようになったら神の国は完成を迎えるでしょう」と記しました。

特別な誰かではなく、わたしたち一人ひとりが、日々の生活における他者との交わりの中で、支え合いながら、分かち合いながら、信仰の共同体が行う福音宣教の業に呼ばれています。